



本田由紀著

戦後日本型循環モデルを超えて

もじれる社会

2人に1人が大学へ進学する時代である。しかし、大学卒業者が増加しても労働需要が変化するわけではない。就職活動は激戦化し、選考過程は多様化した。従来の「学力」に加え、「コミュニケーション能力」「人間力」「生きるチカラ」といった習得や計測が困難で漠然とした「能力」が求められるようになった。こうした新しい能力に対する要請は、従来の能力観を支えていた社会的枠組みの変容を意味している。

本書のサブタイトルにある「戦後日本型循環モデル」とは、「教育」「仕事」「家族」という三つの領域が教育↓仕事↓家族という一直線の矢印によって結合し、循環した構造を指す。教育が新規労働力を生産し、仕事が長期安定雇用や年功賃金を維持することで家族を支え、家族が教育へのエネルギーを供給していたのである。父親は仕事、子供は学校、母親は家族というように、それぞれの領域で役割分担が完結しているのが特徴的で、この枠組みを支えてい

たのが「学力」という能力観であった。しかし近年、この循環にほころびが目立ってきた。教育↓仕事は就職難や不正規労働の拡大によって、仕事↓家族は晩婚化・未婚化・少子化によって、家族↓教育は収入格差・教育格差の拡大によって機能不全に陥りつつある。そんな社会のよじれ、こじれを筆者は「もじれる」と表現する。このもじれる社会で幅を利かしてきたのが、「人間力」といった新たな能力である。

筆者は「人間力」という物差しをあいまいき、恣意性、個々の人間性に対する圧力を問題視しながら、多彩なデータを駆使して「教育」「仕事」「家族」に現れてきた「もじれ」を分析し、解決の道筋を探る。注目すべき提言は少なくない。例えば、従来の教育↓仕事↓家族という一方向的な矢印を双方向的な矢印に変えなければならぬと説く。具体的には、教育と仕事を結び力レント教育、仕事と家族を結びワークライフバランス、家族と教育を結び「開かれた学校」といった施策である。現代社会の閉塞感とその処方箋を論じた問題提起の書である。

(九州大准教授 大賀哲)

ほんた・ゆき 1964年
生まれ。東京大大学院教授。教育社会学。著書に『軌む社会』など。